

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発・実施支援事業報告書

プログラム名	静岡市不登校対応研修プログラム
プログラムの特徴	<p>本プログラムでは、各教員がこれまでの児童生徒に対する自分自身の支援を振り返ったり、対応の傾向を知ったりすることを通して、新たな視点を持ち、様々な背景をもつ児童生徒へ柔軟に対応するための研修にそれぞれ取り組みます。</p> <p>この研修で身につけた知識や指導方法を、未然防止及び、登校しぶりや欠席が長期に涉っている児童生徒へのより適切な支援につなげていくことを目的としております。</p> <p>作成にあたっては、校長会、教諭による学校現場の視点と静岡大学、常葉大学、静岡市特別支援教育センター、静岡市子ども若者相談センター、静岡市教育センターの専門的観点を融合させており、大学と市が共同で開発した取り組みとなります。</p> <p>本プログラムを通し、不登校児童生徒のみならず、児童生徒の様々な表れに対する理解を深め、支援の幅を広げていくことで、児童生徒のより良い成長につなげていただくことを願っています。</p>

教員は、自分が日常で使用する校務支援パソコン上で、不登校に関わる様々な質問に回答し、それらの回答結果を基にした個人の支援傾向が表示される「不登校対応振り返りシート」に取り組みます。その後、12の講座からなる「支援のヒント集」を選択受講します。

令和 2年 3月

機関名 静岡市教育委員会
連携先 静岡大学
常葉大学
静岡市特別支援教育センター
静岡市子ども若者相談センター
静岡市教育センター
株式会社 ステップコム

プログラムの全体概要

プログラムの概要

背景（静岡市の不登校児童生徒の現状 平成30年まで）

不登校児童生徒数が小学校、中学校ともに全国比より高い

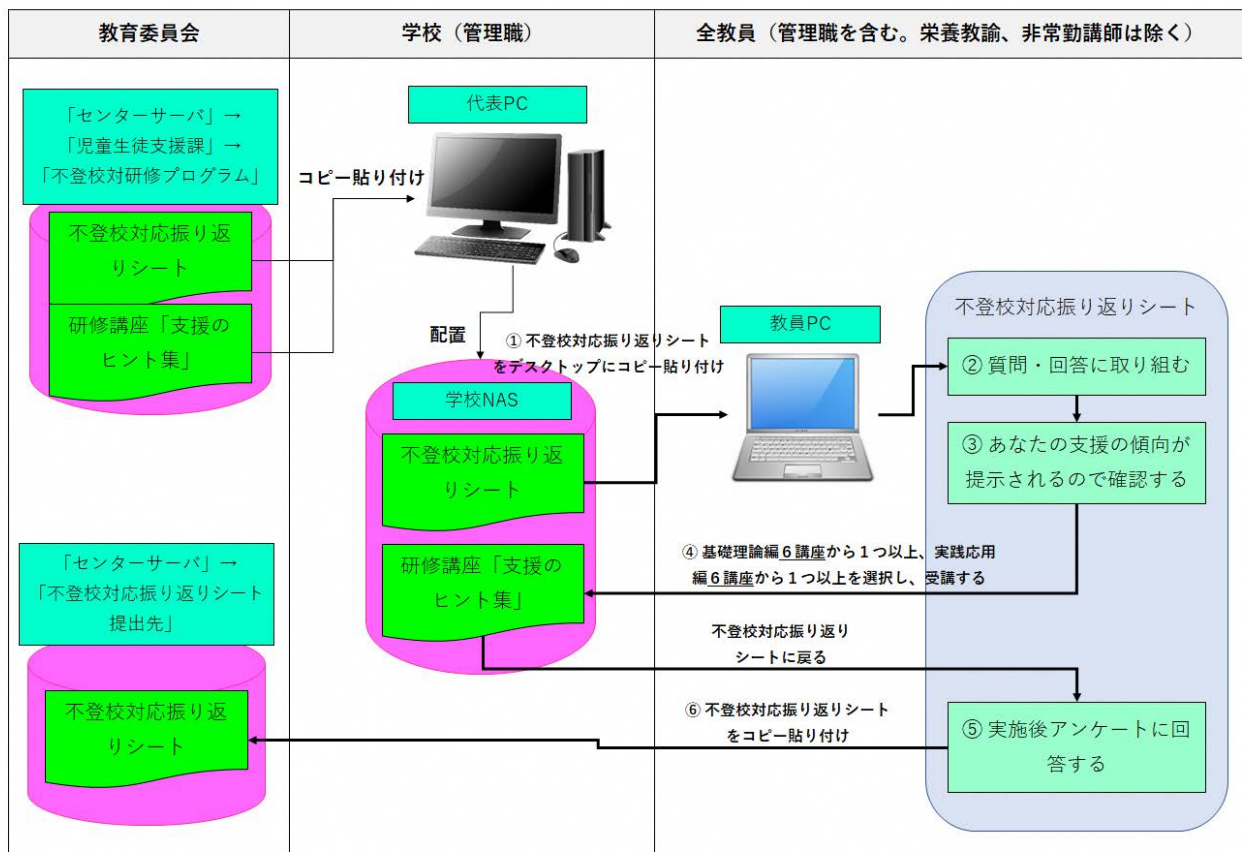
小学校では、この5年間で約2.4倍と大幅に増え、中学校では不登校発現率で毎年全国を大きく上回っている

静岡市総合教育会議で全教員を対象とした研修の実施が決定

研修の目標

各教員がこれまでの児童生徒に対する自分自身の支援を振り返ったり、対応の傾向を知ったりすることを通して、新たな視点を持ち、様々な背景をもつ児童生徒への適切な支援につなげる

研修方法



自分の支援の傾向をつかみ、不登校について様々な手立てを知ったことで、教員一人ひとりが今後の支援について前向きに考えるようになった。

1 開発の背景・目的・方法・組織

① 開発の背景

「平成 29 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果によると、不登校児童生徒数が全国的に増加している中、静岡市においても同様に増加傾向が認められます。特に、不登校児童生徒の発現率においては、小学校で全国平均の 0.54%に対して、静岡市は 0.77%、中学校で全国平均の 3.25%に対して、静岡市は 4.54%となっており、全国平均を上回る不登校発現率を減少させることは喫緊の課題となっています。

そこで、静岡市では不登校対策を「総合教育会議」の重点課題に据えて、児童生徒一人ひとりの特性を理解することや、個に応じた適切な対応、社会的自立に向けて切れ目なく社会資源とのつながりを持たせていく施策等を実施し、不登校対策を組織的・計画的に行うこととしている。その一つとして、静岡市教育委員会児童生徒支援課を中心として、市内の教職大学院を設置する 2 大学の協力を仰ぎながら、「不登校対応振り返りシート」を利用した研修プログラムの開発を行うこととしました。

② 開発の目的

本研修プログラムは、不登校振り返りシートの実施を通して、各教員がこれまでの児童生徒に対する自分自身の支援を振り返ったり、対応の傾向を知ったりすることを通して、新たな視点を持ち、様々な背景をもつ児童生徒へ柔軟に対応することを目的としております。

この研修で身につけた知識や指導方法を、未然防止及び、登校しぶりや欠席が長期化している児童生徒へのより適切な支援につなげていければと考えております。

③ 開発の方法

不登校対応振り返りシートの作成については、地元 2 つの教職大学院や静岡市の適応指導教室を運営する子ども若者相談センター、静岡市教育委員会（特別支援教育センター、教育センター、児童生徒支援課）、校長会と現職教員の共同開発によって、専門的な知見と現場の視点と双方を生かしたより高度な研修プログラムの構築を目指します。

また、静岡市では、校務支援システムの導入や部活動ガイドラインの策定など教員の多忙化解消対策が進められていますが、時間外勤務は多く、今後も多忙化解消に向けた取組を推進していかなければなりません。本研修プログラムは、全学校に配備されている校務支援システムを利用する研修であるため、市内全教員が勤務校において短時間で取り組むことができ、招集参加型の研修とは異なり、時間的に、労力的にコスト削減が期待できることから、教員の多忙化解消にも貢献できると考えています。

④ 開発組織

本プログラムを実施するにあたり、主にプログラムの構造を協議、決定していく不登校対応研修プログラム作成委員会と構造を更に具体化していく不登校対応研修プログラム作業部会の 2 つの組織を設けました。作成委員会は、静岡大学、常葉大学よりそれぞれ 2 名の教授、特別支援教育センター、教育センターの各専門機関より、各 1 名の指導主事、校長会の代表者 1 名、児童生徒支援課長で構成しました。また、作業部会では、特別支援教育センター、教育センター、子ども若者相談センターより各 1 名の指導主事、5 名の現職教員、静岡大学、常葉大学それぞれの大学院生 2 名、事務局として児童生徒支援課 係長 1 名、指導主事 2 名で構成しました。

○ 組織体制

不登校対応研修プログラム作成委員会 委員

◆委員長

静岡市児童生徒支援課長 栗田 保孝

副委員長

静岡市特別支援教育センター 主席指導主事 伏見 倫也

◆委員

国立大学法人静岡大学大学院教育研究課 教授 原田 唯司

立命館大学大学院 教職研究科 教授（静岡大学大学院教育研究課 非常勤講師）
伊田 勝憲

常葉大学教育学部 教授 伊東 明子

常葉大学教育学部 准教授 浅井 夏美

静岡市校長会代表 静岡市立西豊田小学校 校長 大村 秀治

静岡市教育センター 指導主事 榊原 さと子

◆事務局員

静岡市児童生徒支援課・主幹兼係長 每熊 省一

静岡市児童生徒支援課 指導主事 鈴木 重行

静岡市児童生徒支援課 指導主事 杉山 信人

不登校対応研修プログラム作業部会部員

◆部長

静岡市児童生徒支援課・主幹兼係長 每熊 省一

◆部員

静岡市特別支援教育センター 主席指導主事 伏見 倫也

静岡市教育センター 指導主事 榊原 さと子

静岡市子ども若者相談センター 指導主事 植田 温子

静岡市立中島小学校 教諭 横原 護

静岡市立田町小学校 教諭 片柳 宏章

静岡市立清水辻小学校 教諭 戸田 宇海

静岡市立大里中学校 教諭 古牧 大輔

静岡市立清水飯田中学校 教諭 加茂 雅章

静岡大学教職大学院 島田 直人

静岡大学教職大学院 白井 孝明

常葉大学教職大学院 川井 巳由

常葉大学教職大学院 山田 真未

◆部員（事務局員）

静岡市児童生徒支援課 指導主事 鈴木 重行

静岡市児童生徒支援課 指導主事 杉山 信人

2 開発の実際とその成果

①プログラム完成までの会合

令和2年2月のプログラム実施までに、作成委員会と作業部会をそれぞれ4回、準備会をそれぞれ1回行い、プログラムの内容について協議しました。

作成委員会 準備会 平成31年1月18日（清水庁舎）

○参加者

作成委員会委員 8名 事務局員 3名

○内容

- ・不登校対応研修プログラムの趣旨説明および方向性の確認。
- ・不登校対応振り返りシートにおける質問の柱案（未然防止，早期発見，適切な対応，関係機関との連携）の協議および研修プログラムの内容や作業部会での検討内容を決定する。

◆委員より

<研修全般について>

- ・日常の個人研修はとても良い。・教員が不登校の研修を受ける機会は実際乏しい。
- ・多くの教員は色々と手を尽くしているので、教員の対応が悪いというスタイルで研修を始めると教員のモチベーションを下げってしまう恐れがある。
- ・原因が分からない不登校が増えている中、どこに焦点を充てていくかがポイントになる。
- ・教師として何ができるかヒントになるもの、頑張りを認めた上で力量向上を図るものにした。
- ・不登校児童生徒への視点，姿勢，考え方，個人のタイプを明確にし，足りないところを研修していくスタイルが良い。
- ・担任と級外，不登校がクラスにいる担任，いない担任。教員と養護教諭等で質問を分けた方が，モチベーションが高くなるのではないかな。
- ・教員は皆教職員評価につながると考えてしまう。
- ・総合教育会議の資料は，「昔ながらの生徒指導」など現場の教員にとって好ましくない表現が含まれている。子どもの目線に立って支援のできる教師の育成を目指したい。
- ・質問項目が多いので，整理が必要。項目によるばらつきも多い。
- ・困っている教員を助けたり，対応のヒントになるようなプログラムにできれば。
- ・自分は教員としてどこの位置にいるか。素材を通して主体的な研修につなげていきたい。
- ・誰の強制も受けなくて，今後どう動いていけばいいか，支援していく。
- ・対応の困っていない教員もいるが，そういう教員にもあれっと思わせるものにした。自ら研修していく必要性，知りたいと思わせる。あなたにはこの研修がお勧めですよ。と大学の講義など紹介する形も望ましいのでは。

<チェックシートについて>

- ・教職員評価に結びつけない，モチベーションを下げない ことが重要
- ・色々な子がいる中で，子どもの目線に立ち，子どもに寄り添うことができる眼，姿勢をもった教員を育てたい。
- ・異動ごとに実施するのも良いか？地域性，子どもの実態，学校の様子なども違うので…。
- ・不登校の要因は多岐にわたる中で，このシートに取り組むことの意味を知らせたい。
- ・不登校に関わる要因の全体像のイメージをもつことも研修となる。
- ・市のシステムの研修システム（エスナビ）のように簡単に取り組むことのできるものが良いかと思う。

<質問の柱案（未然防止，早期発見，適切な対応，関係機関との連携）について>

- ・ 全員一律の問題でなく，例えば初発問で「不登校児童生徒を現在担当している，担当していない」などの質問をし，その後教員の現在の実態に応じた質問・回答に進むという幾つかのパターンを用意した方が，教員のモチベーションが高まった研修になるのではないかと。
- ・ 困っていることを洗い出してからその内容によって次の質問を選択していく方法がよいのではないかと。

◆事務局より

- ・ 生徒指導担当者に押しつけの生徒指導はやめていこうと言ったが，原案だと押しつけの生徒指導と同じような姿勢での研修になりそうであった。児童生徒支援課には，教員の適切な対応により，事態が悪化しているケースもあるので，そういう姿勢になっていた。



作業部会 準備会 平成 31 年 2 月 18 日（清水庁舎）

○参加者

作業部会部員 12 名 事務局部員 3 名

○内容

- ・ 不登校対応研修プログラムの趣旨説明および方向性の確認。
- ・ 総合教育会議（不登校対策）の説明
- ・ 第 1 回の作成委員会の内容伝達

◆部員より

- ・ 本研修のゴールが見えない。（自分の傾向を知ることが研修になるのか。傾向を知った後に研修をするのか）
- ・ 全国都道府県，市町村で同じような取組みがあるのであれば，参考にしたらどうか。
- ・ 不登校の増加の原因のすべてが教員にあると思われ，教員のモチベーションが下がるのでは。
- ・ 不登校の支援の手順や関係機関の特徴，つなぎ方を教えてくれれば勉強になるのではないかと。
- ・ 不登校を切り口に生徒指導全般の対応力を上げる研修にしたい。
- ・ 4 つの柱の中では「未然防止」こそが本当に必要な項目である。

◆事務局より

- ・ 自らの対応の仕方をチェックすることで，不登校対応における自分の傾向の気づきにしたい。
- ・ パソコン上で全教員が実施できるよう大学と連携していきたい。



第1回作成委員会 令和元年5月22日（清水庁舎）

○参加者

作成委員会委員 8名 事務局員 3名

○内容

- ・不登校対応研修プログラムの設問に関する大項目、中項目等についての確認。
- ・不登校対応振り返りシートにおける設問の10の視点について協議、決定する。

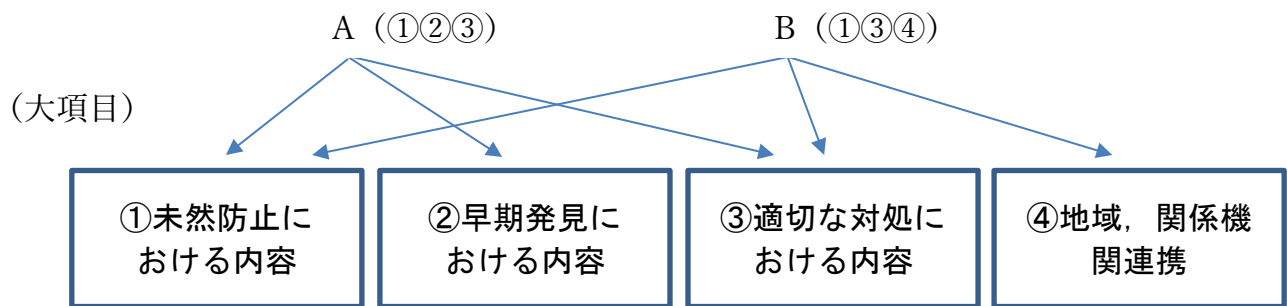


<設問に関する大項目、中項目について>

A, Bのようなニーズにより、設問を変える場合

A 「不登校の子に直接関わっている、対応に困ることがある」
 「登校しぶりの子の学校への登校意欲を高めるためには？」
 「相談機関を紹介してあげたいが、どのように伝えるか迷うことがある」

B 「今、不登校の子がいないので、未然防止に力を入れたい。」



(中項目) …この中から1問程度出題する

<p><① 未然防止></p> <ul style="list-style-type: none"> ○わかりやすい授業づくり ○子ども同士の関係づくり ○教師と子どもとの関係づくり ○安心感、所属感のある学級づくり ○特性を持つ子の理解と支援 	<p><② 早期発見></p> <ul style="list-style-type: none"> ○予兆への気づき（子どもの心の変化の読み取り） ○特性をもつ子どもへの配慮 ○積極的な声掛け ○気になる子どもと話をじっくり聴く機会の確保 	<p><③ 適切な対処></p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもへの接し方（気持ちの聴き方、声掛け） ○保護者との関係づくり ○不登校児童生徒の見方、捉え方 ○校内の受け入れ体制 ○SC, SSWとの連携（養護教諭） 	<p><④ 機関連携></p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもの気持ちの聴き方 ○各機関の保護者への紹介の仕方 ○機関、保護者、学校との連携 ○病院との連携 ○適応指導教室との連携
--	---	--	--

<質問数>

各大項目5問程度（回答数 教職員一人20問～25問を目安）を予定

<回答後>

- ①質問の回答に応じて、回答者の不登校対応のタイプが表示される。
- ②その後複数の研修が紹介され、校務支援パソコンを用い、それぞれのタイミングで受講する。

不登校対応振り返りシートの視点について 資料1

① 規律秩序 vs 個の受容

児童生徒の不登校傾向に対する教員としての対処や支援の方向性の違いを表す。

児童生徒の不登校やその前兆への教員としての対処の仕方として、

- A 学級集団の規律や秩序の維持をより重視するか、
- B 個人の事情や思い、特性などに配慮して受容的姿勢で接することをより重視するか

② 弱点克服 vs 強み活用 (対処支援のレベル)

不登校傾向に対する対処や支援の視点の置き方に関する考え方の違いを表す。

不登校傾向にある児童生徒の

- A 学習面や人間関係面、自己意識面などの課題や弱点の克服に取り組むことが大切であると考えるか、

- B 課題や弱点があることを認めつつも、当該児童生徒の強みやできていることを探し出して活用することを考えるか

不登校傾向に対する対応や支援策として、対象児童生徒が抱える課題解決を目指すか、よさやできているところなどの強み（自助資源）を発見し、活用しようとするか

③ 特性（能力）重視 vs 状況重視

不登校の原因の求め方の違いを表す。

児童生徒の不登校傾向の背景として

- A 本人の性格や気質、能力など内的特性に基本的な課題があると考え

- B 家庭内の親子関係や生活リズム、学級内の友人関係や地位、学習の苦手さなど本人が置かれた状況に関わる多様な要因の複合と考えるか

不登校傾向の原因を個人の内的特性に帰属させるか、状況要因に求めるか

④ 問題行動 vs 必要行動

不登校状態の意味づけの違いを表す。

- A 不登校は児童生徒が抱えている課題や弱さの表れであると考え、学力の確保や人間関係づくりの面で不利益となるために児童生徒にとっては問題行動であると考えるか。

- B 当該児童生徒にとっては登校しないことに何らかの肯定的な意味があり、必要な行為であると考えるか。

⑤ 個人対応 vs 組織連携 (対処支援のレベル)

不登校傾向に対する対処や支援の主体の位置づけに関する考え方の違い

不登校あるいはその先駆的兆候を表している児童生徒の支援に関して、

- A 学級担任として行動の観察や関係情報の収集に努め、可能な限り有効な手立てを考え、実行すべきであると考えるか、

- B 予兆が表れた段階で直ちに学年主任や生徒指導主事などに連絡し、見立てと支援について組織的に取り組む必要があると考えるか

不登校傾向のある児童生徒に対する支援を学級担任の個人的努力を中心に考えるか、はじめから職員間の連携協力が必要であると考えるか

○委員より

<研修全般について>

- ・初任者で不登校に悩む先生は多い。振り返りシートを実際にやってみて、「実際の自分の対応」と「理想」の両方があり、特に「未然防止」については理想を求めてしまう。
- ・固定的な見方ではなく、両方を備えていることが重要。自分の現状を見つめさせるプログラムにしたい。若手の教員が柔軟に対応していけるようなプログラムものにしたい。
- ・社会的な望ましさがどの程度あるか確認する必要がある。そのためには、事前の質問におけるサンプル調査が必要。2択で同数くらいに分かれるような選択肢がよい。
- ・サンプルは現場の教員から得たい。さまざまな世代の方がいるとよい。
- ・回答後に先生の傾向を分かりやすく出せるか、評価の出し方が難しい。
- ・学校をとりまく社会が急変している中、不登校対応は「学校だけではない」と言われる中、先生側に迷いがあり、学校だけで解決できない要因がある。

<導入について>

- ・導入部に「普段あなたが接している児童生徒を想像して」という表現を入れたい。
- ・不登校に対する危機感をもたせ、現場の教員には応援の姿勢で教員のがんばろうという気持ちを育む導入部にしたい。

<振り返りシートの質問について>

- ・この振り返りシートは、どちらが正しいというよりは、どんな特性なのかを確認するものになる。質問に容易に答えられるよう質問の文字数を少なくしたい。
- ・「自分ならこう考える」という表現を質問に入れたい。
- ・事前に振り返りシートの質問案に回答してみたが「自分なら」と考える質問と、「今なら」と考える質問と、両方がある。
- ・選択肢が迷う内容だと、本音を出しやすいのではないか。
- ・1項目の分量は短い方がよいが、短いと感想でチェックをつけてしまう可能性がある。分量があると内容をじっくり読めるが、時間がかかってしまう。
- ・各質問の文言をより柔らかいものにしたい。あまり漢語を使わないようにする。
- ・質問は「あなたならどうするのか?」という表現で統一する。
- ・「迅速に」「すみやかに」など表現は統一する。
- ・視点①に「規律」という言葉があるが、その言葉を見ただけでチェックをしてしまいがち。→「ルール」という言葉に変更する。

<視点について>

- ・本プログラムのねらいに返ることが大事。振り返り資料1ページの視点①で「規律」と出ている。集団指導として規律重視は大事だが、不登校の児童生徒は個別支援が大事。最終的に、先生方に多様な視点を身につけさせたい。
- ・不登校の要因として、非行もあれば、家庭の教育方針としての不登校もある。まわりの要因もある。目の前の児童生徒を登校させたいのか、一般的な不登校対策として考えさせたいのかによって、内容が変わってくる。
- ・身近な教員に意見を聞きたい。意味が伝わるくらいの長さにするために、周到的な準備や協議が必要。

第1回作業部会 令和元年5月31日(清水庁舎)

○参加者 作業部員12名 事務局3名

○内容 作成委員会での意向を受け、視点を踏まえた質問・回答について修正作業した。

第2回作成委員会 令和元年9月4日（清水庁舎）

○参加者

作成委員会委員 7名 事務局員 3名

○内容

- ・不登校対応研修プログラムの設問の視点から因子の変更について（資料2参照）
- ・不登校対応振り返りシートにおける質問の内容について（資料3）

◆事務局より提案

- ・サンプル調査の分析から、以下のように視点を因子に変更していく



- ①特性重視－状況重視
- ②問題行動－必要行動
- ③規律秩序－個の受容
- ④弱点克服－強み活用
- ⑤個人対応－組織連携



- 1（課題着目－思い着目）着眼点
- 2（解決志向－受容共感）アプローチ
- 3（社会適応－個別配慮）目標
- 4（迅速対応－情報収集）初動姿勢

<サンプル調査の概要（静岡大学より）>

(1) 方法

①使用した項目

- これまで作成した全 220 項目のうち 134 項目。
- 負担を考慮し、62 項目ずつ 2 つの予備調査 (A, B) を並行実施。

②対象

- 県内教員 142 名 (A : 67 名, B : 75 名)

③時期

- 2019 年 7 月中旬

④分析方法（これまでの視点をもとにした回答で I, II を満たしているか）

- I 類似した意味を持つ項目のまとまりを統計的に推測する解析方法（因子分析・プロマックス回転）の実施。 …回答者の傾向を見るため

- II 実際の遂行の程度に差がない選択肢のペアを定めるために、各項目の平均値と標準偏差の算出。 …2 つの選択肢で回答に偏りが生まれにくくするため

(2) 結果（前スライドのような因子負荷量行列の解釈と命名）

①各因子が示唆する意味内容（（ ）内は短縮表記）

○A 調査より

- 「A1：子どもの特性や置かれた環境・状況に関する多面的な情報収集」（**情報収集**）
- 「A2：子どもが体験している困難さの受け止めと共感」（**受容共感**）
- 「A3：子どもが抱えている課題や弱点への注目」（**課題注目**）
- 「A4：子ども同士の関係づくりを通じた社会的適応の促進」（**社会適応**）

○B 調査より

- 「B1：教師が指示的に関わる解決志向型の指導支援」（**解決志向**）
- 「B2：子どものニーズや思い、できていることへの注目」（**思い注目**）
- 「B3：子どもの特性や置かれた環境・状況に配慮した指導支援」（**個別配慮**）
- 「B4：子どもの様子に即応した具体的な指導支援」（**迅速対応**）

②因子間の相関

A1-A2 間に. 577, B2-B3 間に. 402 というやや高い正の相関が見られた以外は因子間の相関は全体として低く、8 つの因子は互いに独立。→独立した 2 つの考え方・対応の仕方を組み合わせ、二肢強制選択を行うことが可能に。

(3) 指導支援行動の構成要素（因子）の説明

①「A3:子どもが抱えている課題や弱みへの注目-B2:子どものニーズや思い、できていることへの注目」（課題注目-思い注目）

- 指導支援を始めるに当たって、対象児童生徒の課題や弱み、できていないところに目を向けるか、それともニーズや思い、できているところに目を向けるかの相違を表す。指導支援を開始する際の「着眼点」の違い
- これまでの「視点」のうち「④弱点克服-強み活用」に関連。

- ②「B1:教師が指示的に関わる解決志向型の指導支援－A2:困難さを受け止め、共感する姿勢」
(解決志向－受容共感)
- 指導支援を進める際に、教師が解決の方向性や目標を示し、望ましい状態に至るように児童生徒を導こうとするか、それとも対象児童生徒の困難さを受け止め、共感する姿勢をとろうとするかの相違を表す。指導支援を進める上での「アプローチ」の違い
 - これまでの「視点」のうち「③規律秩序－個の受容」「④弱点克服－強み活用」に関連
- ③「A4:子ども同士の関係づくりを通じた社会的適応の促進－B3:子どもの特性や置かれた環境・状況に配慮した指導支援」(社会適応－個別配慮)
- 指導支援を行う目標として、友だちや集団関係など他者との関係づくりを通じた社会的適応の改善を主として想定するか、それとも個の特性や置かれた環境・状況に応じて個別の配慮を行うことを考えるかの相違を表す。指導支援の「目標」を社会的適応とするか個人的適応とするかの違い
 - これまでの「視点」には該当しない。
- ④「B4:子どもの様子や課題に即応した具体的な指導支援－A1:子どもの特性や置かれた環境・状況に関する多面的な情報収集」(迅速対応－情報収集)
- 指導支援を行う際に、児童生徒の様子や抱えている課題に応じて、その時点で必要と思われる対応を速やかに行おうとするか、それとも対象児童生徒の特性や状況に関する情報を多面的に収集しようとするかの初動時の動きに関する相違を表す。指導支援を行うに際しての「初動姿勢」の違い
 - これまでの「視点」には該当しない。

不登校対応振り返りシート質問・回答例

資料3

(1) 昨年度から欠席が続いている児童生徒を、本年度から赴任したあなたが担任をすることになりました。
 新年度の初日の朝、その児童生徒の保護者から体調不良で欠席をするとの電話連絡がありました。
 あなたがその日の放課後どのような対応をするか選んでください。

原案	選択肢	因子	平均	標準偏差
	自己紹介を兼ねて、家庭訪問をするようにする。	迅速対応	—	—
	翌日からの児童生徒に合った適切な対応を考えるために、その児童生徒に関する情報を他の先生から集めるようにする。	情報収集	—	—

(2) ずっと欠席が続いていた児童生徒が、ある日の2時間目の休み時間に久しぶりに登校してきて、担任のあなたは玄関でばったりと出会いました。
 児童生徒の髪形や服装は乱れ、大きな変化が見られました。
 あなたはその児童生徒にどのような対応をするか選んでください。

原案	選択肢	因子	平均	標準偏差
	教室に入るために、身なり正すことの大切さを伝え、その日は下校を促す。	解決志向	3.66	1.596
	身なりのことは触れず、登校しようと思った気持ちや家庭での様子を聞くようにする。	受容共感	4.55	1.293

◆事務局より

- ・まずは質問・回答をつくる着眼点と例文について、2つ目は研修プログラムと画面レイアウトと個人の振り返りについて、3つ目は研修素材について。上位の協議を詰めていくことで、質問の完成度、レイアウト等を高めていきたい。

◆委員より

＜視点から因子の変更について＞

- ・当初の5つの視点は構想段階で出てきたもの。サンプル調査（市外の教員対象）を実施し、類似性を分析したところ（因子分析法）、8つの因子があり4つのペアが妥当と確認した。
- ・項目が減ったことで、明確になった。サンプル調査後の項目を前提に進めてよいと思う。
- ・今までの視点だと、誰もが選ぶという選択肢にするのが難しかった。現在の因子のペアの方が迷いやすく、傾向が出やすいのではないか。
- ・4つのペアになり、言葉（因子のもつ意味）が分かりやすくなった。

<質問・回答例について>

- ・始業式前に担任はすでに決定しているので、通常なら春休み中に対応しているのではないか。春休み中の対応をした上で、初日の対応なのか？これ以外の設問についても、詳細まで検討していく必要がある。
- ・質問に「本年度から赴任した」とあるが、この文言を入れているところに意図がある。情報収集に限界があり、不登校の児童生徒と関係をつくるのが難しいという状況での設問。
- ・小学校と中学校でも、実態は異なる。中学校の教員は持ち上がりの傾向があり、担任でない生徒についても状況を把握していることが多い。「本年度から赴任」というのは、小学校ではそれほど特殊な話ではない。切実感のある設問。
- ・なるべく具体的な表現にしないと、若い教員が状況を理解できない。「本年度赴任」という状況を若い教員がイメージするのは難しい。また、文言も分かりやすくしたり統一したりしたい。「新年度初日」より「4月〇日の朝」の方がイメージしやすい。「その日のうちに」と「放課後」が同じ時間帯ならば、表現をそろえたい。
- ・「選択肢には1つの意味しか入れない」というのが原則。例えば「～するとともに」という選択肢は避け、「(まずは)情報を集める」という内容に整理するなど。
- ・電話連絡を受けたのは担任か？他の教員か？担任が受け、母と話をしているとなると、まずは情報収集と対策検討という組織対応となる。担任以外だと、まずは電話となってくる。
- ・この設問は、担任が電話を受けた形の方がよい。
- ・若い教員は、上司に相談するという意識が強い。ベテランは上段の選択をするが、若手は下段を選択しがち。明日以降の対応について考えるという設定もある。
- ・心理学的には、選択肢1つにつき1つの意味にすべきだが、いろいろなことを聞きたいという意図がある。この設問は「個人対応ー組織連携」という要素も入っている。絞った方がよいのか、合わせ技がよいのか、悩む。ある重大事態ケースで、いきなり家庭訪問したところ、不法侵入扱いされたケースもある。
- ・最後に総合評価をすることになると思うが、どういう終わり方をするのか？何を期待して質問するか？それが見えないと、質問項目の検討は難しい。
- ・先ほどの設問でいうと、迅速対応を選んだ人は、迅速対応のタイプであると。
- ・中学校限定の設問。小学校の教員は服装の乱れなどのイメージがわからない。こういう状況は小学校ではあり得ない。茶髪程度だとスルーしてしまう。大半の教員は下段を選択する。
- ・小学校では、ネグレクトの対応で迷う場合がある。
- ・平均値が低めに出ている。標準偏差が1.596で個人差が大きい。小・中別にしたら、差が小さくなるかも。

<診断の表記方法について>

◆事務局より

- ・質問・回答で選択肢のどちらかを選ぶにあたり、どちらも大事で選べないという状況が想定される。選択肢の内容が自分の考えにどの程度当てはまるか。6段階を考えている。

◆委員より

- ・6と6も可能にし、1つに選べない気持ちを表現してもらうことはいい。
- ・所見の作成は難しいが、右側の4次元ごとに本人の結果と市の平均を、そして、校種別、経験年数別を載せる。解説版に市全体の所見を載せるにしても、個人所見は難しい。自己診断という形はどうだろう。
- ・個人の診断をレーダーチャートで表すのがシンプルでよい。棒グラフも悪くない。「(数値の)高すぎ・低すぎは悪いことではない。」という説明があればよい。

<研修素材（質問・回答後の講義）の検討について>

◆委員より

- ・短めの、2～3分の動画をイメージしたことはある。動画のリンクをおとす方法もある。容量が厳しいのであれば、例えば、Youtubeにアップし、限定公開という形はできないか。
- ・動画の著作権は、教育委員会としたい。動画の容量の大きさによって、対応が異なってくる。
- ・容量については、業者に確認することと校務支援システムとして確認することがある。
- ・パワーポイントで静止画をクリックする程度ならやれそう。動画を含めて要検討したい。あと、研修は「理論・解説編」「実践・紹介編」という2つのカテゴリーに分けたい。大学の授業でやっているものを応用できないか。
- ・研修は、大学の授業の一コマを活用する形でもよい。パワーポイント8～10枚くらいでもよいのではないか。
- ・特総研の校内研修動画10～15分くらいでよい？
- ・長くない方がよい。無理やり動画にしなくてもよい。

第2回作業部会 令和元年9月30日（清水庁舎）

○参加者 作業部員 12名 事務局 3名

○内容 作成委員会での意向を受け、因子をもとにした質問・回答について修正作業した。

第3回作成委員会 令和元年10月11日（清水庁舎）

○参加者

作成委員会委員 7名 事務局員 3名

○内容

- ・不登校対応振り返りシートの導入について
- ・研修後アンケートについて
- ・結果から導いた個人傾向に対する因子ごとの所見について
- ・研修素材（個人が受講する講座）について



<不登校対応振り返りシートの導入部分について> …内容については、資料7参照

◆委員より

- ・できるだけシンプルな画面にしたい。字が多いと読まなくなる。短すぎると伝わらないが、字を大きく、わかりやすく、場合によっては文章にしたものを配布するのもいいのでは。
- ・図表を文章の中に入れ込むことで、書かれていることが図表を見てわかる。
- ・多くの先生方は不登校を減らしたいと思っているので、前向きに取り組めるような導入にしたい。教員の積極的な姿勢をいかにつくるか。教育長に動画で語ってもらうとか、目的、意義等は別に添付する画面でもよい。気楽に目的等を確認できるように。
- ・先生方がその気になるように。「不登校をなくそう」のような、スローガン、呼びかけるようなものがほしい。

<研修後アンケートについて> …内容については、資料10 参照

◆委員より

- ・年齢は必要なく、教職経験年数だけでよいのでは。講師歴を含む。校種を入れた方がよい。
- ・研修素材ごとで何人受講したかも大事。
- ・4段階での評価はよい。
- ・自由記述は賛成。プログラム全体について聞いた方がよいのでは。

<結果から導いた個人傾向に対する因子ごとの所見について> …資料4 参照

◆事務局より

- ・各自が研修終了後に個人のグラフを出す方向で業者と検討している。その際、言葉の補足が必要。他者との比較ができないため、因子を用いて傾向を説明すること考えている。

◆委員より

- ・最初の部分で、予備調査を経て、4つの因子から教員の支援行動を示すものであることを説明したらどうか。グラフに対する解説文も必要。全体の分析もやってもらえるのか？数値を出すことができるのか？全体と個人の比較をしたい。
- ・全体結果をホームページに結果を載せたらどうか。
- ・個人の結果と全体の結果を出すことはできないか。
- ・市全体と比較する意味がどれだけあるか。個人が見るときに必要なのか。本研修は個人レベルではあまり比較の意味がないのでは。管理職や研究者レベルでは、傾向から今後の方向を考えることができる。個人内でのバランスを見る。平均は見たい人が見る。
- ・教職員の育成指標にも関係してくる。成長支援モデルができることは大きなメリット。できれば、個人の素点と換算点の両方を出したい。

<研修素材について>

◆事務局より

- ・研修素材で統一させる部分（形式・内容）をどうするか、どのように種類を用意するか。

◆委員より

- ・基本骨子を確認した上で、あとはそれぞれの機関の得意分野を出していく感じでよいのでは。特別支援教育センターや子ども若者相談センター等は、機関として出したい。
- ・今出ているものでメニューを整えて市である程度の方向性をもとに作成する。
- ・不登校の基礎理解編、実践応用編。現場で優れた実践をしている先生の紹介など。
- ・音声を入れるのが難しい。スライドショーの「記録」機能を使う。
- ・受講時間は1講座10分。校務支援システムで研修一覧に進めれば受講しやすい。
- ・本日持ってきた資料は、大学の授業で使っていたもの。統計的なものを出しながら不登校の傾向を知った上で、対応例を紹介する感じ。広く浅く。短くまとめるつもり

◆事務局より

- ・パワーポイントを使用し、時間差で出す方法でお願いしたい。音声はあってもいいが、すべてでなくてもいい。形態は事務局で用意する。
- ・大学関係者の個人名は出さず、不登校対応研修プログラム作成委員会という名称で。

第3回作業部会 令和元年10月29日（清水庁舎）

○参加者 作業部員12名 事務局3名

○内容 作成委員会での意向を受け、個人傾向に対する因子ごとの所見を作成した。

結果から導いた個人傾向に対する因子ごとの所見 案 資料4

※絶対評価によるもの

例 課題注目⇔思い注目の場合

○「課題」側へ偏っている

対象とする児童生徒が困っているときに、児童生徒自身の課題や他の児童生徒に比べてできていないところにまず目を向けるようにしているようです。たとえば、児童生徒が悩みを持っていることに気づいたとき、悩みの原因となっている学習面や生活上の課題などをまず明らかにして、本人がその課題の解決や改善を目指すことができるよう指導や支援を工夫していると考えられます。つらさや思いを受け止め、できているところやがんばりを認める姿勢をより示すことで、より効果的な支援につながっていくと考えられます。

○中間（どちらへも偏りが見られない）

対象とする児童生徒が困っているときに、課題や他と比べてできていないところだけではなく、児童生徒がその課題を克服するために一生懸命頑張っているところの両面に目を向けられているようです。児童生徒の悩みの原因となっている学習面や生活上の課題などを明らかにしたうえで、児童生徒の思いや努力を受け止めつつ指導や支援を工夫していると考えられます。

○「思い」側へ偏っている

対象とする児童生徒が困っているときに、児童生徒ががんばっているところやすでにできていること、何とか課題を克服しようとして一生懸命に考えているところなどにまず着目するようになっているようです。たとえば、不登校傾向の表われを示している児童生徒に対しては、本人がやりたいことを探し出し、わずかなことであっても取り組んだことを称賛するなど、児童生徒の思いや努力を受け止めることで有効な支援の手立てを見出そうとしていると考えられます。児童生徒が苦手としている学習面やうまくできなくて悩んでいることなどの課題にどう対処すればよいか、的確に助言を行ったり、気を配っていったりすれば、該当児童生徒からの信頼をさらに厚くなり、効果的な支援につながっていくと考えられます。

第4回作成委員会 令和元年11月29日（清水庁舎）

○参加者

作成委員会委員 7名 事務局員 3名

○内容

- ・研修シートの導入内容について
- ・事後のアンケートについて
- ・質問・回答全体案の内容，スタイルについて
- ・個人の傾向で表示するグラフ，文言について
- ・研修素材について
 - …概要については，資料9参照



<研修シートの導入内容について>

◆委員より

- ・静岡市として不登校児童生徒が全国平均を上回っていること，その差が拡大していることを教員に明確に伝えたい。そのために見出しを目立つようにしたい。（文章を減らす）
- ・様々な文言が場所によってずれているので統一したい。（例 取組，取組み）
- ・最後は「教師としてこれまでの支援をふり返り，様々な表れを示す児童生徒の理解を深め，支援の幅を広げていきましょう。」というフレーズにする。

<事後のアンケートについて>

- ・「自由記述」とした方が感想など書きやすい。
- ・「大変（参考になった）」を「とても（参考になった）」としたい。
- ・支援をふり返る機会，支援の幅を広げる機会になったかなど，目的を評価するものにした

<質問・回答全体案の内容，スタイル（質問・回答数20問 縦形式）について>

◆事務局より

- ・事前調査をから受容・解決では「受容」に寄り，社会・個別では「個別」に寄り，迅速・情報では「迅速」に寄った。各教員の支援の方向が出るよう，作業部会で文言を吟味した。

◆委員より

- ・その子の支援の目標が，社会に適応することを目標とするのか，自分なりに生きていけばいいということなのか，「個別配慮」と「社会適応」の違いの捉えを明確にしたい。
- ・事前に学生で予備調査をしたら，個人により差が生じたので出来具合はよい。
- ・今回の視点で作業部会での最終検討をお願いしたい。

<個人の傾向で表示するグラフ，文言について>

◆事務局より

- ・対比の因子ごと，左右にグラフの棒がのびるような表現方法を考えている。

◆委員より

- ・グラフで示されたものと，個人の傾向の文章が同じ画面に表示された方がよい。
- ・「課題を重視する傾向があります。」という断定しない言い方にしたい。
- ・最後に総合的な所見のようなもので，見方，捉え方を伝えたい。

<研修素材について>

◆事務局より

- ・各委員が作成した素材を見て、意見をしたい。

◆委員より

- ・これで終わるというメッセージを入れたい。
- ・内容が教員には難しい。眺めて終わりのものでなく、分かりやすいものも入れたい。
- ・色々なジャンルのものをパターン化せず、紹介したい。
- ・クリックする等の動きや事例があるとありがたい。
- ・今後困った時に、ここに立ち返る素材として研修後も教員が見られるようにしたい。
- ・1素材も10分で、基礎講座、応用講座各1つ以上見ていただくよう設定したらどうか。

第4回作業部会 令和元年12月12日（清水庁舎）

○参加者 作業部員12名 事務局3名

○内容 作成委員会での意向を受け、研修シートの導入内容、事後のアンケート、質問・回答案、個人の傾向の表示の仕方、研修素材について最終検討した。個人の傾向については資料4をもとに資料5を作成した。また、資料6にあるようなレーダーチャートを用いることにした。

<p>あなたは 課題に注目 することを大切にしている傾向があります。</p>	<p>あなたは 思いに注目 することを大切にしている傾向があります。</p>
<p>あなたは、児童生徒が困っているときに、その児童生徒自身の課題やうまくできていないところに目を向け、その課題の解決に向けた指導や支援を大切にしている傾向があります。児童生徒の思いに寄り添い、頑張っていることやできていることをより一層認めていくことにより、児童生徒への理解はより深まるでしょう。</p>	<p>あなたは、児童生徒が困っているときに、その児童生徒のがんばりや努力しているところに目を向け、児童生徒の思いを第一に考え、指導や支援を大切にしている傾向があります。児童生徒の抱えている課題を明確にし、その解決に向けての助言をしていくことで、児童生徒の課題解決の力はより向上していくでしょう。</p>
<p>あなたは 解決志向 の姿勢を大切にしている傾向があります。</p>	<p>あなたは 受容共感 の姿勢を大切にしている傾向があります。</p>
<p>あなたは、学習上・生活上の課題がある児童生徒への指導や支援を考えるとときに、解決の方向性や目標を分かりやすく示すことを大切にしている傾向があります。児童生徒の思いを受け止め、実態やペースに合わせた段階的な支援をすることで、目標の達成により近づくことができるでしょう。</p>	<p>あなたは、学習上・生活上の課題がある児童生徒への指導や支援を考えるとときに、児童生徒が抱えている困難さを受け止め、共感する姿勢を大切にしている傾向があります。解決の方向性を児童生徒に示していくことで、児童生徒が明確な目標をもって課題解決に向かうことができるでしょう。</p>
<p>あなたは 社会的な適応 を大切にしている傾向があります。</p>	<p>あなたは 個別配慮 を大切にしている傾向があります。</p>
<p>あなたは、集団生活におけるきまりや約束を意識させることで、児童生徒が社会的に適応していくことを大切にしている傾向があります。児童生徒の実態やその場の状況に合わせて柔軟な対応と支援を行うことにより、児童生徒一人ひとりがより安心して学校生活を送ることができるようになるでしょう。</p>	<p>あなたは、児童生徒に関わる際に、「個」の違いや事情、特性等を大切にしている傾向があります。学校生活を送る上で、必要な場面では友達とのかかわり方や集団におけるきまりや約束を明確にしながらか支援していくことで、集団（学級・学年）の中で他者と関わる力の向上が望めるようになるでしょう。</p>
<p>あなたは情報収集 を大切にしている傾向があります。</p>	<p>あなたは迅速対応 を大切にしている傾向があります。</p>
<p>あなたは、児童生徒の課題に気付いた際に、対応を考える上で必要な情報を多面的に収集することを大切にしている傾向があります。具体的な指導・支援を迅速に講じることで、課題が長期化、複雑化するのを未然に防ぐとともに、新たな成果や課題が見えやすくなるでしょう。</p>	<p>あなたは、児童生徒の課題に気付いた際に、その時点で必要と思われる対応を迅速に判断し、対応することを大切にしている傾向があります。今まで児童生徒にかかわってきた教職員や外部機関などからの情報を集め、参考にしていくことで、より効果的な支援方法を見出すことができるでしょう。</p>

(支援の傾向①)

あなたの児童生徒に対する支援の傾向①

下の8つの傾向は、大学と連携して行われた調査・分析をもとに導き出されたものです。今回マークされた傾向が、回答結果から見られたあなたの支援の傾向になります。不登校児童生徒に柔軟に対応していくためには、まず、児童生徒における様々な背景や特徴を知っておく必要があります。今後、児童生徒に対応する上で、あなたの支援の傾向を大切にしながらも、その場面や背景によって支援方法を使い分けたり、複数の教員と支援について検討したりすることで、よりよい支援方法が導き出され、効果的な支援につながっていくと思います。

あなたの支援の傾向 … 課題注目型

あなたは、児童生徒が困っているときに、その児童生徒自身の課題やうまくできていないところに向け、その課題の解決に向けた指導や支援を大切にすることがあります。児童生徒の思いに寄り添い、頑張っていることやできていることをより一層認めていくことにより、児童生徒への理解はより深まるでしょう。



あなたの支援の傾向 … 思い注目型

あなたは、児童生徒が困っているときに、その児童生徒のがんばりや努力しているところに向け、児童生徒の思いを第一に考え、指導や支援を大切にすることがあります。児童生徒の抱えている課題を明確にし、その解決に向けての助言をすることで、児童生徒の課題解決の力はより向上していくでしょう。

あなたの支援の傾向 … 解決志向型

あなたは、学習上・生活上の課題がある児童生徒への指導や支援を考えるときに、解決の方向性や目標を分かりやすく示すことを大切にすることがあります。児童生徒の思いを受け止め、実態やペースに合わせた段階的な支援をすることで、目標の達成により近づくことができるでしょう。



あなたの支援の傾向 … 受容共感型

あなたは、学習上・生活上の課題がある児童生徒への指導や支援を考えるときに、児童生徒が抱えている困難さを受け止め、共感する姿勢を大切にすることがあります。解決の方向性を児童生徒に示していくことで、児童生徒が明確な目標をもって課題解決に向かうことができるでしょう。

あなたの支援の傾向 … 社会適応型

あなたは、集団生活におけるきまりや約束を意識させることで、児童生徒が社会的に適応していくことを大切にすることがあります。児童生徒の実態やその場の状況に合わせて柔軟な対応と支援を行うことにより、児童生徒一人ひとりがより安心して学校生活を送ることができるようになるでしょう。



あなたの支援の傾向 … 個別配慮型

あなたは、児童生徒に関わる際に、「個」の違いや事情、特性等を大切にすることがあります。学校生活を送る上で、必要な場面では友達とのかかわり方や集団におけるきまりや約束を明確にしながらか支援していくことで、集団（学級・学年）の中で他者と関わる力の向上が望めるようになるでしょう。

あなたの支援の傾向 … 迅速対応型

あなたは、児童生徒の課題に気付いた際に、その時点で必要と思われる対応を迅速に判断し、対応することを大切にすることがあります。今まで児童生徒にかかわってきた教職員や外部機関などからの情報を集め、参考にしていくことで、より効果的な支援方法を見出すことができるでしょう。



あなたの支援の傾向 … 情報収集型

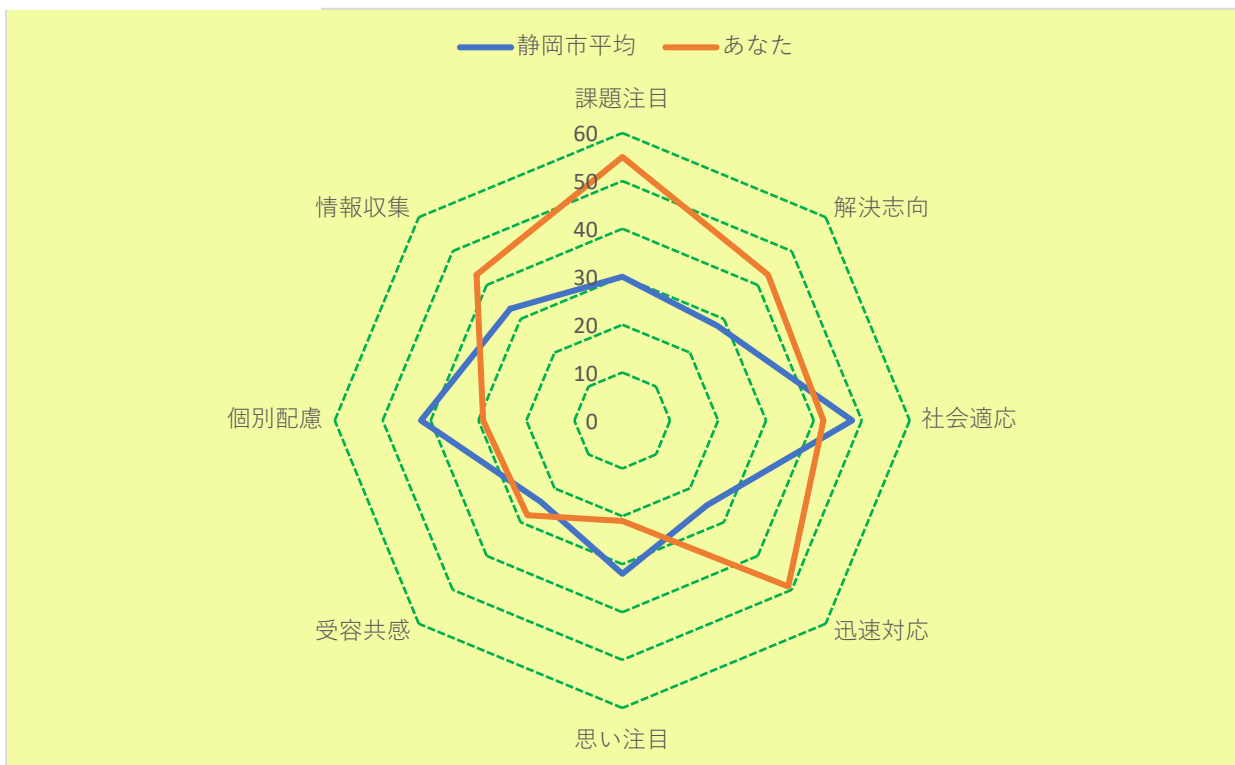
あなたは、児童生徒の課題に気付いた際に、対応を考える上で必要な情報を多面的に収集することを大切にすることがあります。具体的な指導・支援を迅速に講じることで、課題が長期化、複雑化するのを未然に防ぐとともに、新たな成果や課題が見えやすくなるでしょう。

印刷

一時保存

次へ

(支援の傾向②)



不登校対応研修プログラム 実施後アンケート

1～5の質問に教えてください。

1 年齢（2020年3月31日現在）

- ① 20歳代 ② 30歳代 ③ 40歳代 ④ 50歳代以上

2 教職経験年数（2020年3月31日現在。②～⑥は講師歴、育休等の期間も含む）

- ① 新規採用者 ② 2年～5年 ③ 6～10年 ④ 11年～20年
 ⑤ 21年～30年 ⑥ 31年以上

3 不登校の対応に関わる20の設問・回答、個人の支援傾向提示を通して自分自身の不登校支援を振り返る機会となったか。

- A とても思う B 少し思う C あまり思わない D 全く思わない

4 研修講座「支援のヒント集」（Ⅰ、Ⅱからそれぞれ1つ以上を受講）について A～Dを選択する。

Ⅰ 受講した研修講座（「支援のヒント集 基礎理論編」）

① 現代における不登校の基礎知識

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

② 子ども若者相談センターで行っている支援とは

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

③ 「特別支援」の基礎知識

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

④ アタッチメントと不登校

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

⑤ 「システム」として見る

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

⑥ 「静岡市における不登校傾向にある児童生徒の実態調査報告」から分かること

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

II 受講した研修講座（「支援のヒント集 実践応用編」）

⑦ 校内の別室運営にあたってのポイント

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

⑧ これからの不登校支援

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

⑨ 「UD（ユニバーサルデザイン）」の視点を活かした支援

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

⑩ 先生たちへの応援メッセージ

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

⑪ 登校への拒否感はどのようにして生ずるか

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

⑫ 「いじめ防止対策推進法」を踏まえた不登校対応

- A とても参考になった B 少し参考になった
 C あまり参考にならなかった D 全く参考にならなかった

取消

5 研修全般について

① 本研修プログラムにより、不登校児童生徒に対する理解や支援方法について新たな視点をもつ機会となったか。

- A とてもそう思う B 少し思う C あまり思わない D 全く思わない

② 本研修プログラムにより、不登校児童生徒のみならず、様々な背景をもつ児童生徒に柔軟に対応していくために、支援の幅を広げていく機会となったか。

- A とてもそう思う B 少し思う C あまり思わない D 全く思わない

③ 本研修プログラムを通して、自分のこれまでの支援についてどのような気づきがありましたか。

④ 本研修プログラムを通して、今後の支援についてどのようなことに取り組んでみようと思いましたか。（全員記入してください）

※ 改行は Alt + Enter で入力できます。

前へ

一時保存

次へ

② 研修実施

I 研修期間 令和2年2月3日（月）～ 令和2年2月14日（金）

II 対象 静岡市内全教員（管理職を含む。栄養教諭，非常勤講師は除く。）

III 内容

- (1) 「不登校の対応に関わる20の設問」に回答する。
- (2) 回答結果（あなたの児童生徒に対する支援の傾向）を確認する。
- (3) 研修講座「支援のヒント集」から2講座以上（基礎理論編6講座から1つ以上，応用実践編6講座から1つ以上）を受講する。
- (4) 実施後アンケートに回答する。
- (5) (1)(2)(4)のデータ（不登校対応振り返りシート）を指定されたフォルダに提出する。

IV 方法

- (1) 資料7「静岡市不登校対応研修プログラムについて（実施の背景）」を教頭が対象教員へ事前に配付し，対象教員が研修の目的や内容を事前に理解できるようにしておく。
- (2) 対象教員が校務支援パソコンを用いて，期間内に実施する。

※ I～IVのとおり、本研修を実施した。

静岡市不登校対応研修プログラムについて (実施の背景)

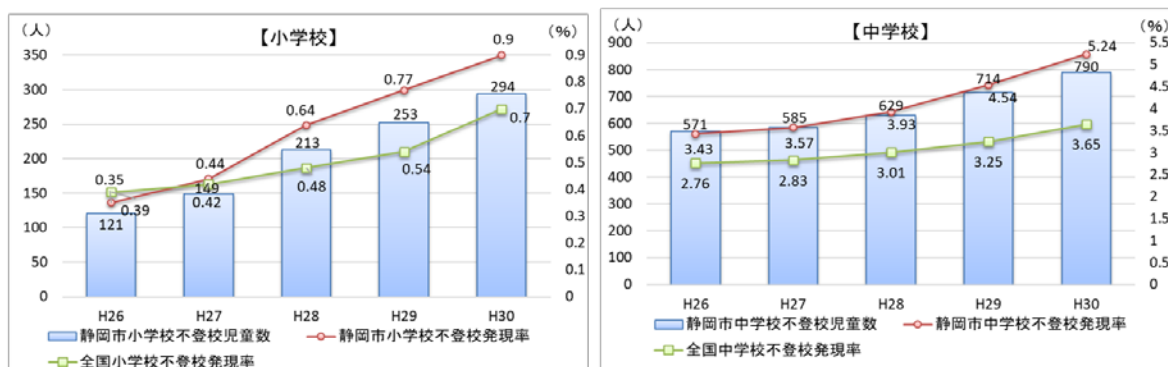
1 はじめに

静岡市の不登校児童生徒数は、小中学校ともに5年連続で増加しており、発現率においては全国平均を上回り、その差が拡大しています。(資料1参照)。

不登校児童生徒への支援については、先生方の継続的な取組みのもと、一定の成果は表れていますが、不登校の原因は複合的なものが多いため、対応に苦慮されている学校も多いのではないかと思います。

そうした中、平成30年度静岡市総合教育会議において、増加する不登校児童生徒への対応について協議され、その施策の1つとして教員研修を実施することになり、子どもたちの様々な表れに対して柔軟に対応することを目指し、本プログラムの作成に至りました。

不登校児童生徒の発現率



【出典】文部科学省 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査
静岡市不登校状況調査

静岡市の現状

小学校、中学校ともに**全国比より高い**

小学校では、この**5年間で約2.4倍**と大幅に増え、中学校では不登校発現率で**毎年全国平均を大きく上回っている**

資料1 「不登校児童生徒数・発現率」

2 目的と概要

本プログラムでは、各教員が、これまでの児童生徒に対する自分自身の支援を振り返ったり、対応の傾向を知ったりすることを通して、新たな視点を持ち、様々な背景をもつ児童生徒へ柔軟に対応するための研修にそれぞれ取り組みます。この研修で身につけた知識や指導方法を、未然防止及び、登校しぶりや欠席が長期にわたっている児童生徒へのより適切な支援につなげていくことを目的としています。

作成にあたっては、校長会、教諭による学校現場の視点と静岡大学、常葉大学、特別支援

センター，子ども若者相談センター，教育センターの専門的視点を融合させており，大学と市が共同で開発した全国に先駆けての取組みとなります。

本プログラムを通し，不登校児童生徒のみならず，児童生徒の様々な表れに対する理解を深め，支援の幅を広げていくことで，児童生徒のより良い成長につなげていただくことを願っています。来年度については新規採用者を対象に実施する予定です。

3 不登校対応振り返りプログラムの実施方法について

各学校の校務支援システム上（学校 NAS）から「不登校対応振り返りシート」ファイルをコピーし，自身のパソコンのデスクトップに貼り付け，開始する。

その後，以下①～⑤のような手順で実施します。

- ① 不登校の対応に関わる 20 の設問に回答する。（回答方法については資料 2 参照）
- ② 回答結果「あなたの支援の傾向」を参考に，自分の支援を振り返る。
- ③ 学校 NAS 中の「支援のヒント集」から 2 つ以上の講座を選択し受講する。
- ④ 「実施後アンケート」に回答する。
- ⑤ センターサーバ内「不登校対応振り返りシート提出先」フォルダにシートを提出。

※事前にパソコンの環境設定をお願いする場合があります。不登校対応振り返りシート内に記載された手順に従って進めてください。

設問 1	児童生徒の「居場所づくり」，「絆づくり」のため，あなたが実施している項目を選んでください。	
	より当てはまる方のどちらかに <input checked="" type="checkbox"/> チェックを入れてください。	どの程度、自身の考えに当てはまりますか。 1～6で選んで <input checked="" type="checkbox"/> チェックを入れてください。
	児童生徒に苦手なことがあるときには，その点を克服できるように支援をしながら進んで取り組ませ，学級内で活躍できるように励ます。	<input checked="" type="radio"/> 6 とてもよく当てはまる <input type="radio"/> 5 よく当てはまる <input type="radio"/> 4 どちらかと言えば当てはまる <input type="radio"/> 3 どちらかと言えば当てはまらない <input type="radio"/> 2 あまり当てはまらない <input type="radio"/> 1 ほとんど当てはまらない
	児童生徒が現在得意としていることや好きなことをもとに，部分的であっても活躍の場を設けるようにする。	<input type="radio"/> 6 とてもよく当てはまる <input type="radio"/> 5 よく当てはまる <input checked="" type="radio"/> 4 どちらかと言えば当てはまる <input type="radio"/> 3 どちらかと言えば当てはまらない <input type="radio"/> 2 あまり当てはまらない <input type="radio"/> 1 ほとんど当てはまらない
入力時注意事項	1 / 20	次の質問に行く

資料 2 「不登校対応振り返りシート内 設問形式」

4 実施期間

令和 2 年 2 月 3 日(月)～令和 2 年 2 月 1 4 日(金)

5 不登校対応振り返りシートの提出方法

「実施後アンケート」に回答した後，アンケート終了ボタンをクリックすると職員番号が自動でファイル名となりデスクトップに保存されるので，そのファイルをコピーし，センターサーバ内にある「不登校対応振り返りシート提出先」フォルダに貼り付けをする。（提出完了）

6 本プログラムについての問合せ先（S. Kom内に 2 / 3 より開設）

「児童生徒支援課 不登校対応研修プログラム問合せ先」宛にメールで行うこと。

不登校対応振り返りシート中の質問・回答（一部）

資料 9

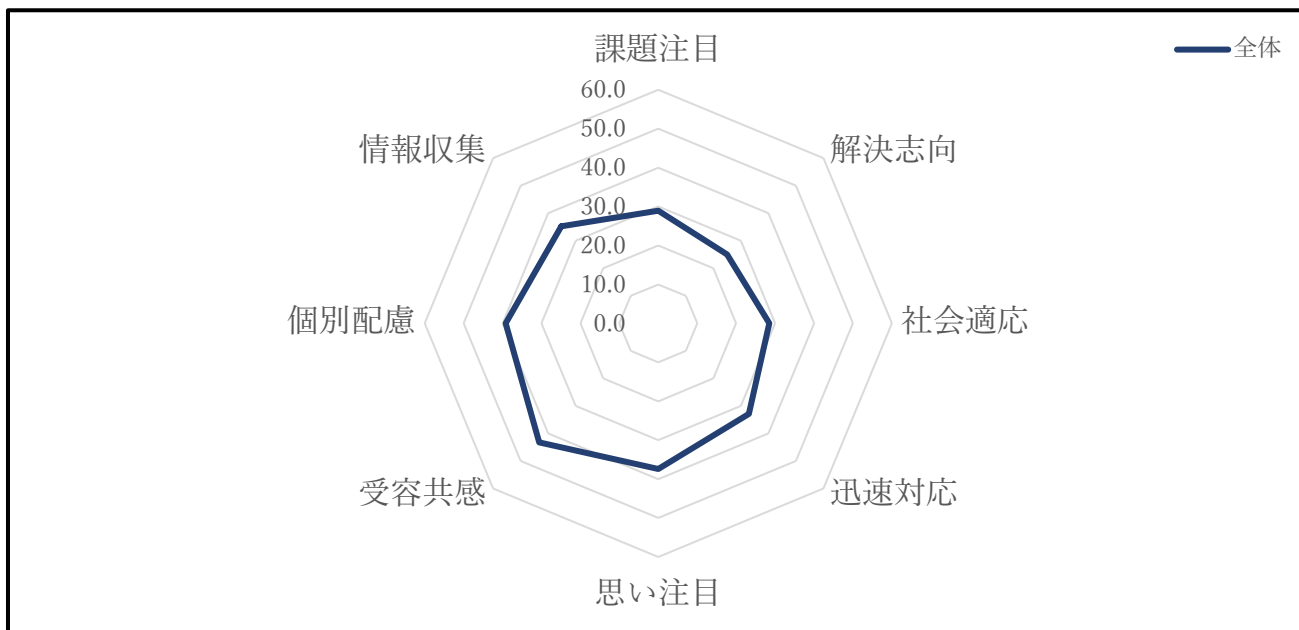
<p>1. 最近になって「頭が痛い」、「おなか が痛い」等の理由で保健室を利用する回 数が増えてきた児童生徒がいます。この 日も「頭が痛いから保健室に行きたい」 とあなたに訴えてきました。本人の様子 から、体調面での心配はなさそうですが、 そのときどのような対応をするか選んで ください。</p>		<p>どの程度、自身の考えに当てはまりますか。1～6で選んで○をつけてくだ さい。</p>					
		ほとんど当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらかと言えば当てはまらない	どちらかと言えば当てはまる	よく当てはまる	とてもよく当てはまる
<p>より当てはまる方のどちらかに☑チェックを入 れてください。</p>							
<p>体調面で心配がないとしても、保 健室を利用することを認め、その 日のうちに本人から話を聞き、気 持ちは理解するようにする。</p>	<input type="checkbox"/>	1	2	3	4	5	6
<p>どうやったら授業に参加できるか 子どもと相談し、「もう少しがんば ってみよう」など、できるだけ 授業に参加していただけるように本 人を励ます。</p>	<input type="checkbox"/>	1	2	3	4	5	6
<p>2. ある日、児童生徒が、普段からあな たが指導をしている約束事を守らず、他 の友達に迷惑をかけてしまいました。あ なたは本人の今後を考え、いつも以上に 厳しく指導をしました。ところが次の日 に「あなたの言動によりショックを受け 学校を欠席する」という連絡が入りまし た。この後、あなたはどのような対応を するか選んでください。</p>		<p>どの程度、自身の考えに当てはまりますか。1～6で選んで○をつけてくだ さい。</p>					
		ほとんど当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらかと言えば当てはまらない	どちらかと言えば当てはまる	よく当てはまる	とてもよく当てはまる
<p>より当てはまる方のどちらかに☑チェックを入 れてください。</p>							
<p>児童生徒がショックを受け欠席し たことを真摯に受け止め、本人の つらかった思いに耳を傾ける。</p>	<input type="checkbox"/>	1	2	3	4	5	6
<p>厳しく指導をした理由について丁 寧に伝え、明日から登校できるよ うに励ましていく。</p>	<input type="checkbox"/>	1	2	3	4	5	6

研修講座「支援のヒント集」紹介コメント

	研修講座番号・研修講座名	紹介コメント
基礎理論編	1 現代における不登校の基礎知識	不登校の現状は？全国や静岡市の様子は？何が原因で不登校となり、私たちにどのような対応が求められているのか。文部科学省の統計データをもとに学びます。
	2 子ども若者相談センターで行っている支援とは	子ども若者相談センターでは何を行っているのか？どうやって相談すればよいのか？教員だけで抱えず、より柔軟な対応をするための連携について学びます。
	3 「特別支援」の基礎知識	静岡市における特別な支援を要する児童生徒の現状および、様々な障害や特性を確認し、「特別支援教育」への理解や関心を高めていきます。
	4 アタッチメントと不登校（音声入り）	児童生徒にとって安心・安全な場所を学校とするための支援策を「アタッチメント（安心感や信頼感の源泉）」の視点から考えていきます。
	5 「システム」として見る（音声入り）	「問題は個人の中ではなくシステムの中にある」という考え方にに基づき、その「システムとは何か」ということを学びながら児童生徒への支援について考えていきます。
	6 「静岡市における不登校傾向にある児童生徒の実態調査報告」から分かること（音声入り）	「静岡市における不登校傾向にある児童生徒の実態調査報告」をもとに、不登校に陥りやすい児童生徒の特徴を捉え、未然防止、早期発見のためのヒントを探ります。
実践応用編	7 校内の別室運営にあたってのポイント	学校の実情に合った別室の活用に向けて、メリット・デメリットを知り、具体的な運営方法について考えます。
	8 これからの不登校支援	ゴールは学校復帰ではなく「社会的自立」。これからの不登校支援のあり方について考えていきます。
	9 「UD（ユニバーサルデザイン）」の視点を活かした支援	誰でも分かりやすく、見通しをもって生活するための「UD（ユニバーサルデザイン）」の視点を取り入れた様々な支援策を紹介します。
	10 先生たちへの応援メッセージ	先輩教員から、これからの教育を担う先生方への応援メッセージです。不登校を防ぐためのヒントや教師としての大切な視点を紹介します。
	11 登校への拒否感はどのようにして生ずるか（音声入り）	「教室に入れない小4女兒」の事例を通して、不登校を改善していくための仕組みについて考えていきます。
	12 「いじめ防止対策推進法」を踏まえた不登校対応（音声入り）	いじめの「重大事態」について学び、「重大事態」が発生した際の学校のとるべき対応および、いじめに関わる不登校の対応について学んでいきます。

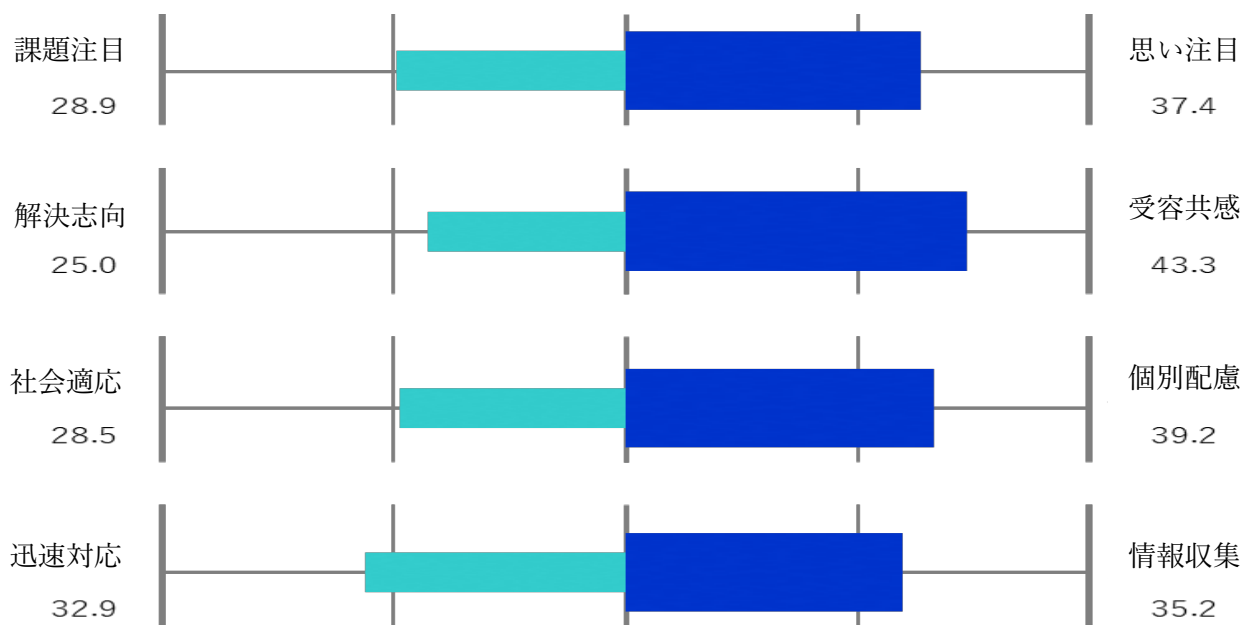
1 本市全教員の児童生徒に対する支援の傾向について

① レーダーチャートより（市全体平均）



II 4つの対比項目について

※数値は平均ポイント



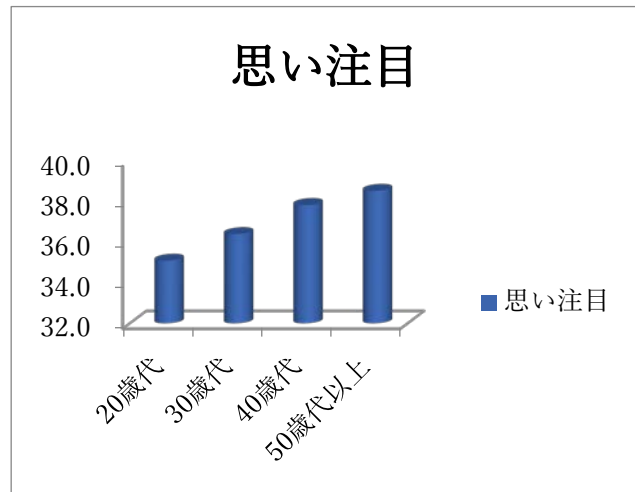
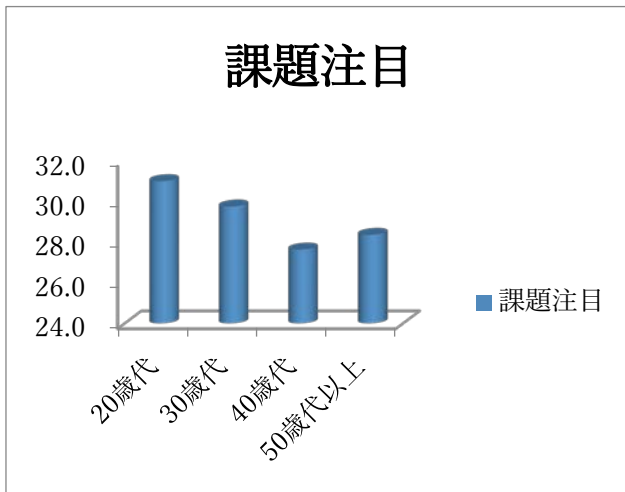
「課題注目—思い注目」「解決志向—受容共感」「社会適応—個別配慮」という対になる項目において、市全体としては「思い注目」「受容共感」「個別配慮」の方を重視する傾向が見られた。「迅速対応—情報収集」では、差がほとんど見られなかった。本市の教員としては、児童生徒に対応する際に子どもの思いに耳を傾け、受容したり、個に応じた対応を心掛けたりしている教員が多いことが分かった。

また、行動を起こす際には、情報を集めることを優先したり、場合によってはすぐに行動を起こしたりして、その時々ケースに必要な対応を選択していると考えられる。

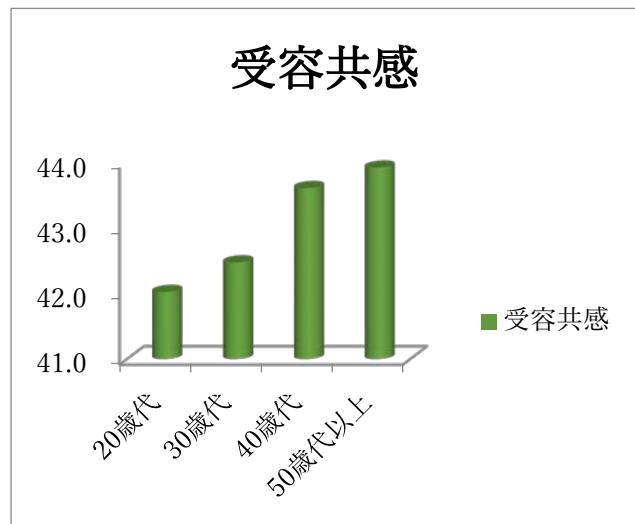
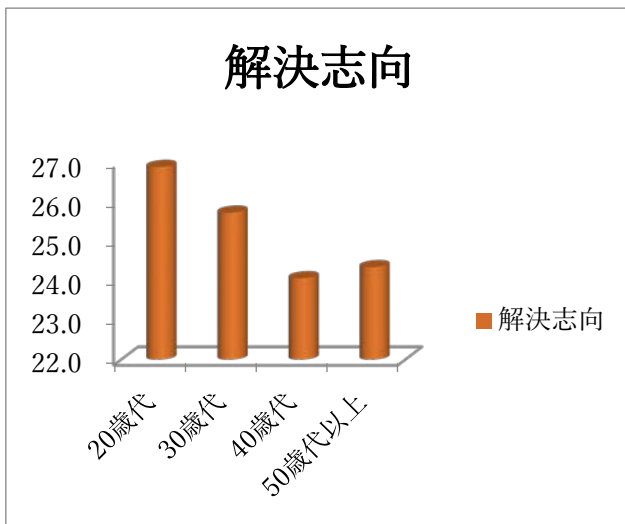
2 傾向別平均ポイントについて

① 年代別平均ポイント

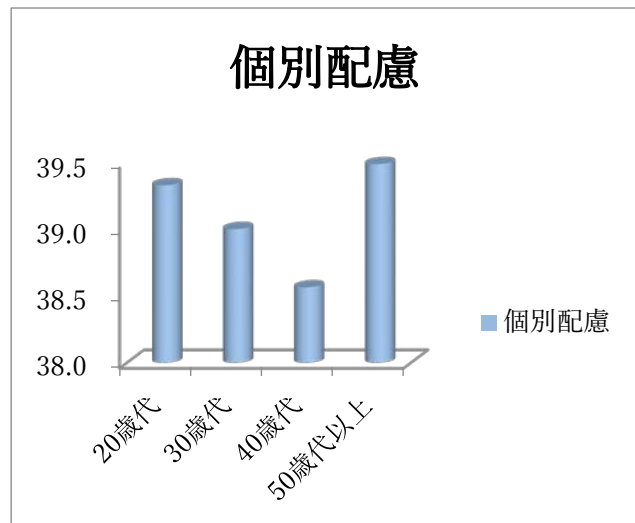
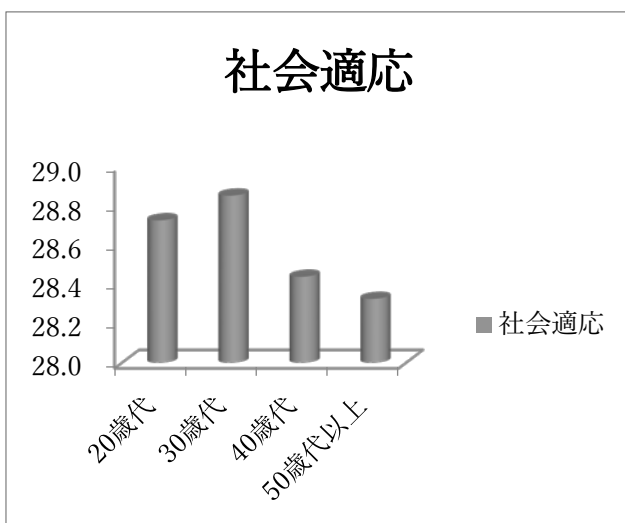
「課題注目—思い注目」



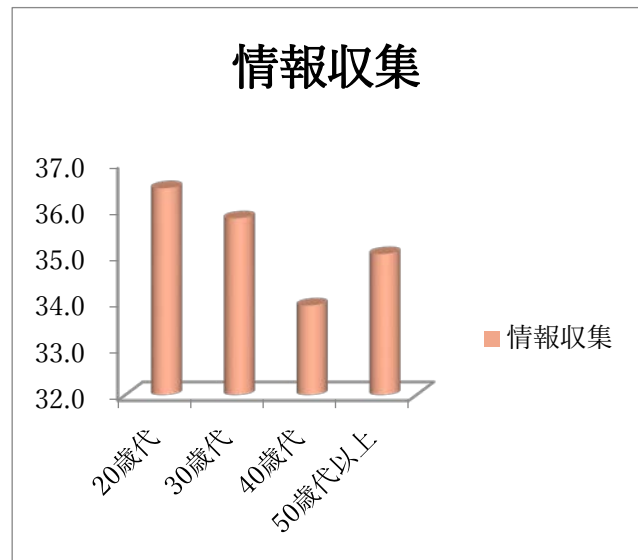
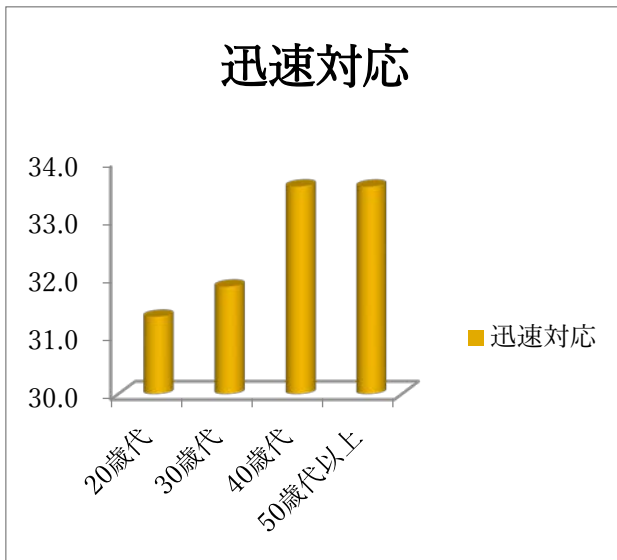
「解決志向—受容共感」



「社会適応—個別配慮」



「迅速対応—情報収集」



全体的な傾向として、「課題注目—思い注目」や「解決思考—受容共感」からは、若い世代で児童生徒の抱える課題に注目し、その課題を解決することを重視する傾向が見られる。また、年代が上がるにつれ、児童生徒の思いを重視していく傾向が見られる。「迅速対応—情報収集」からは、若い世代ではまず情報を収集することに力を入れ、ベテランの世代では迅速に対応していくことを大切にしている傾向が見られる。

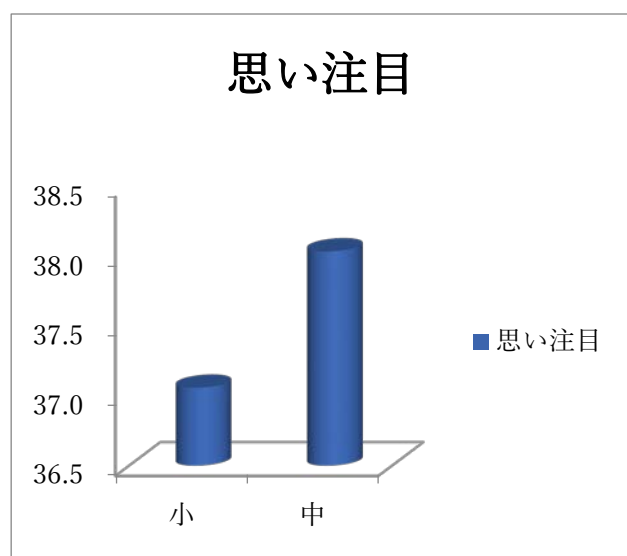
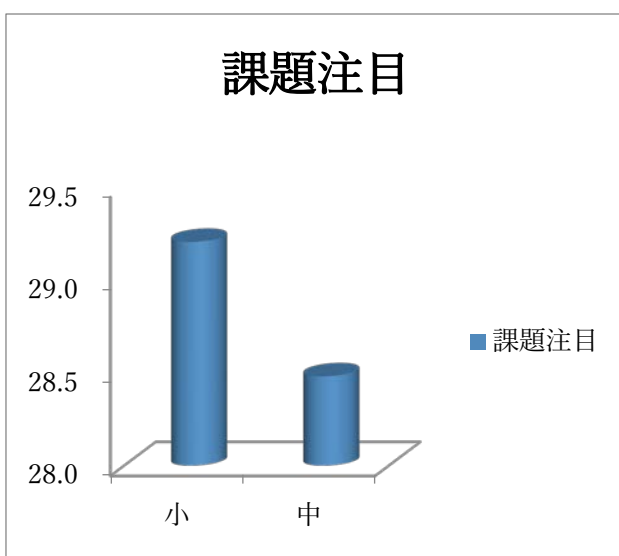
20歳代では、児童生徒が社会に適応することに重点をおいた支援を行う傾向が見られ、30歳代では、その割合が更に高くなっている。

40歳代では、児童生徒の思いを十分に聞き、それを受け入れることに重点を置いた支援や素早い対応に力を注ぐような傾向が見られる。

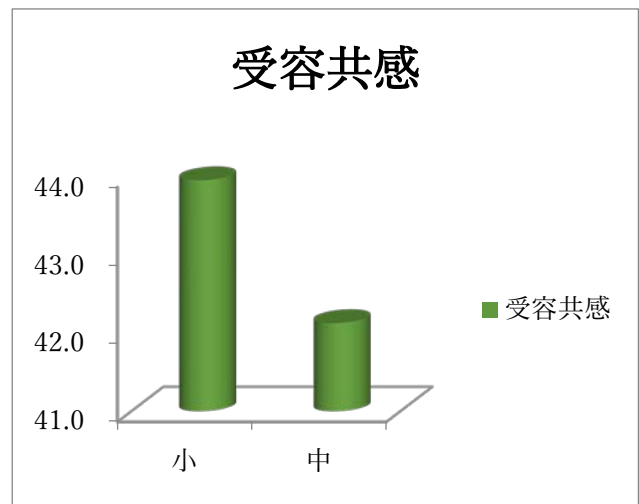
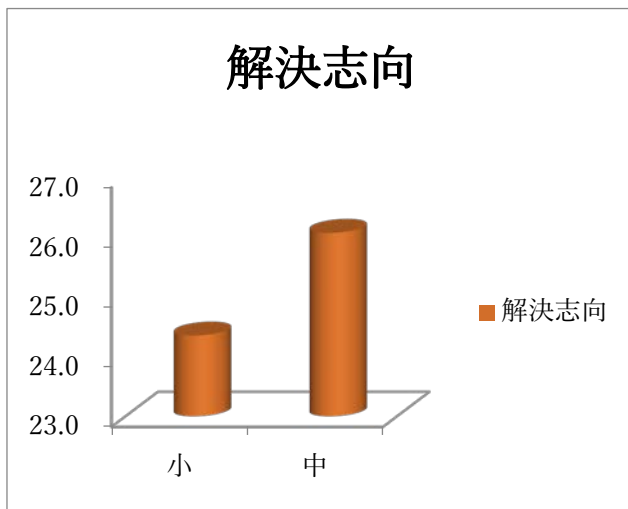
50歳代以上では、40歳代の児童生徒の思いを受容していく姿勢に加え、個の状況に応じた対応にも力を注ぐ傾向が見られる。また、迅速な行動を心掛けながらも、情報を収集していくことを大切にしている傾向が見られる。

③ 小・中学校別平均ポイント

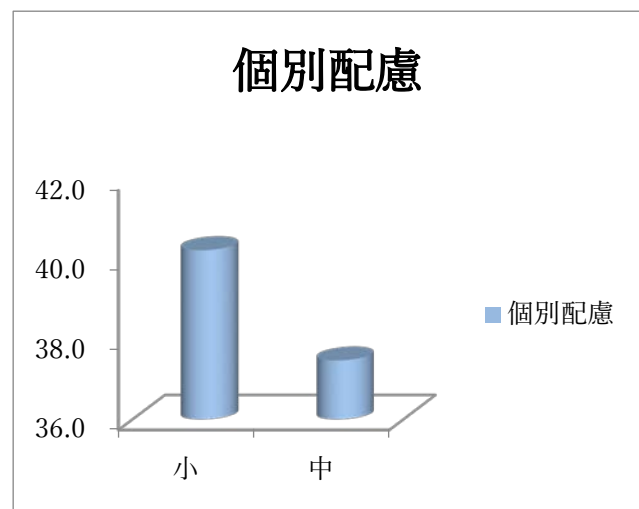
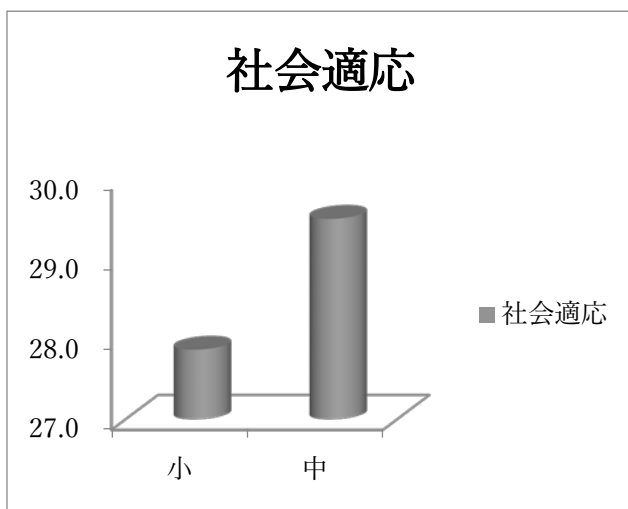
「課題注目—思い注目」



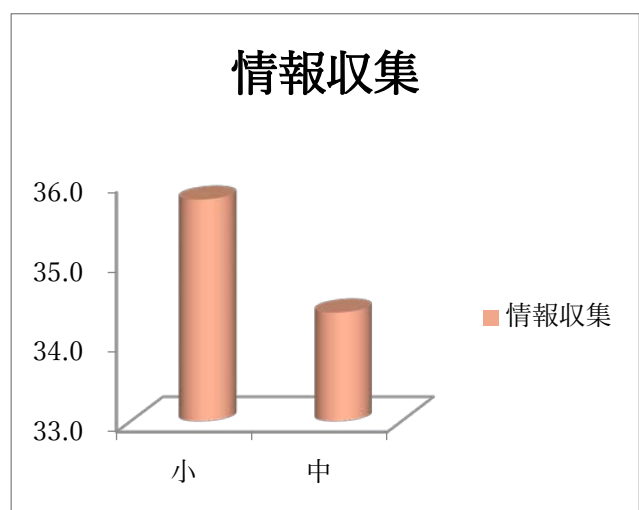
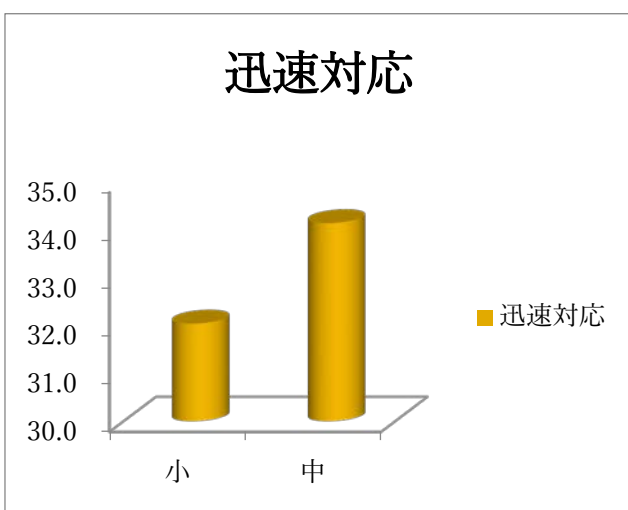
「解決志向—受容共感」



「社会適応—個別配慮」



「迅速対応—情報収集」



各項目の対比結果から、小学校では「課題注目」「受容共感」「個別配慮」「情報収集」の平均ポイントが高く、中学校では「思い注目」「解決志向」「社会適応」「迅速対応」の平均ポイントが高かった。

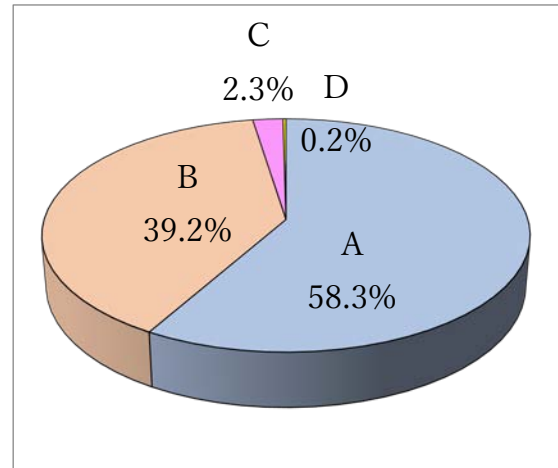
各項目で小学校と中学校の平均ポイントに違いがはっきりと表れたのは、発達段階や卒業後の進路指導の違い等により、それぞれの校種で教員が重点をおく項目に違いが出たためであると考えられる。

3 実施後アンケートより

◆質問3

不登校対応振り返りシートの質問・回答、個人の支援傾向提示を通して自分自

- A とてもそう思う B 少し思う
C あまり思わない D 全く思わない

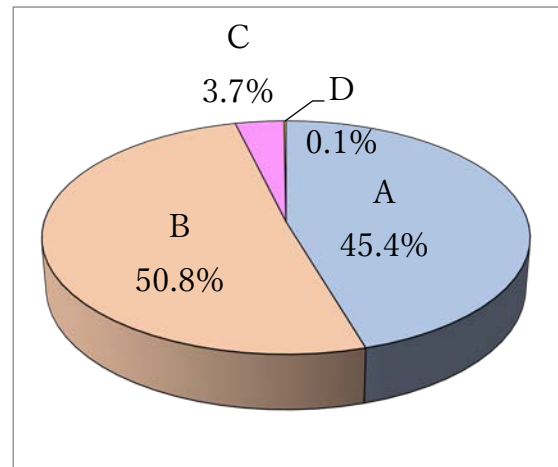


97.5%の教員が「不登校対応振り返りシートの質問・回答や個人の支援傾向提示を通して自分自身の不登校支援を振り返る機会となったと思う」と回答している。

◆質問5①

本研修プログラムにより、不登校児童生徒に対する理解や支援方法について新たな視点をもつ機会となったか。

- A とてもそう思う B 少し思う
C あまり思わない D 全く思わない

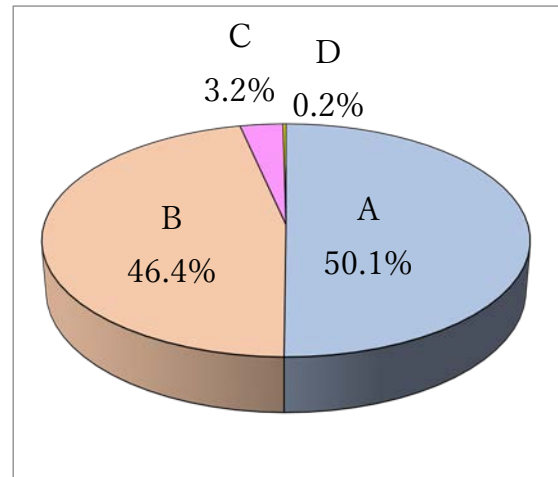


96.2%の教員が「本研修プログラムにより、不登校児童生徒に対する理解や支援方法について新たな視点をもつ機会となったと思う」と回答している。

◆質問5②

本研修プログラムにより、不登校児童生徒のみならず、様々な背景をもつ児童生徒に柔軟に対応していくために、支援の幅を広げていく機会となったか。

- A とてもそう思う B少し思う
C あまり思わない D全く思わない



96.5%の教員が「本研修プログラムにより、不登校児童生徒のみならず、様々な背景をもつ児童生徒に柔軟に対応していくために、支援の幅を広げていく機会となったと思う」と回答している。

◆質問5③

本研修プログラムを通して、自分のこれまでの支援についてどのような気づきが

(記載された内容の一部)

- 改めて、このような研修をすることで、今までの対応を振り返ると共に、新しい見方をしていく必要性を感じた。若手、ベテラン問わず、常に対応への新しい情報を理解し、日々の子どもの見方から変えていく必要があることを再認識した。
- 20の設問に答える際に、今までに担任したり、学年主任としてかかわったりした児童生徒のことを思い出した。また、個々のケースに寄り添いながら一律の対応ではなかったことにも気づいた。今回の研修は今までの経験値を理論として再構築するきっかけとなった。
- 自分の児童支援の傾向を客観的に考える良い機会になった。個々の児童や家庭によって変えたほうが良い対応と、どの子、どの家庭でも同じように大切にしなければならない対応があるのではないかと感じた。
- 自分の支援傾向を2つの選択肢から選ぶとき、似たような経験や今までの子どもとのやり取りを想像した。支援をするときに「あの時の声掛けは、もう少し子どもに寄り添った発言をすべきだったかもしれない」と、自分の支援の在り方について考え直すことができた。
- 選択肢はどれも当てはまるような気がして、選ぶのは難しかった。でも、どれもあり得ることで、何を優先して考えていくかを大切にしたいと思った。また、目指すゴールが、悩んでいる生徒への押しつけにならないようにするためにはどうしたら良いのか、まだまだ研修を積みなければいけないと思った。

◆質問5④

本研修プログラムを通して、今後の支援についてどのようなことに取り組んで

(記載された内容の一部)

- まずその子をしっかりと見る。理解する努力をする。そして、最適だと思われる支援をするにあたり、一人で悩まず、学年や学校の先生方と相談しながら考えていきたい。
- 現在特別支援を必要としている子が多く、その子たちが学習や学校生活に困難さを示して不登校になるように感じているため、そうならないためにユニバーサルデザインを意識した教室や授業を作っていきたい。
- 不登校は生徒自身もつらい部分があるが、保護者も精神的にまいってしまうことがある。生徒だけでなく家庭にも温かな支援をしていきたいと思う。そのためには職員間の共通理解や保護者と良い人間関係を構築すること、必要によっては外部機関とも積極的に関わっていくことが大事だと思った。
- 本研修プログラムの結果を見る限り、生徒や状況に対し多面的な考えや可能性を探ることが大切であり、その中で適切であろう対策について、スピード感をもって行っていくことが重要であると感じた。
- 児童生徒の抱える困り感等から学ぶ場所や方法等を多くの教員で考え、共有することが最も重要と考える。ただし、児童生徒の困り感や問題行動だけに目を向けるのではなく、基本的には児童生徒の成長を語り合える職員室であることが前提にあると考えた。
- 今までの経験から不登校支援では、何とかその児童や保護者の力になってあげたいといつも考える。家庭、学校、外部機関等が1チームで取り組む必要性を改めて感じた。また、ゴールは学校復帰ではなく「社会的自立」「困った子は困っている子」等、とても共感する言葉や内容がたくさんあった。本人や家族に寄り添う姿勢を大切にしていきたいと痛感した。
- 常日頃から、子ども一人一人をよく見て、子どもの様子を知り、小さな変化にも気づくことができるようにしたいと思った。そして、想像力を持って、不安や悩みを理解し、支援方法を考え、個々に応じた対応をしていきたい。
- 不登校などに対する意識が高まったことにより、様々な仕事で忙しい中、後回しになってしまいがちな不登校や登校しぶりに対し、なるべく早い段階で解決につながる方法を行っていかうという意識が高まった。

4 研修を通して

児童生徒に対する支援傾向の比較（年齢別，小中別）により，年齢や校種による傾向の違いが表れた。このことは，教職経験の長さや支援する児童生徒の発達段階によるものが関連していると考えられる。不登校児童生徒への対応については「課題注目」「思い注目」など8つの項目のどれも大切な視点であると考えられることから，年齢や校種の違いなど支援傾向や強みの違う教員が複数集まり，個々の児童生徒に合った支援を様々な角度から意見を集め，協議することは大切な手段であるといえる。また，様々な視点という意味では，スクールカウンセラー，スクールソーシャルワーカー，外部機関からの意見を取り入れることも重要であるといえる。

事後アンケートの質問3，5①，5②の回答結果より，本プログラムのねらいの1つである「各教員が，これまでの児童生徒に対する自分自身の支援を振り返ったり，対応の傾向を知ったりすることを通して，新たな視点をもつ」については，多くの教員が達成できたと考えられる。

アンケートの質問5③，④で記載された教員の内容には，教員自身がそれぞれ気づいた視点に基づき，児童生徒への支援に積極的に取り組んでいこうとする意欲や決意が表れている回答が多かった。

今後，本プログラムのもう1つのねらいである「本研修で身につけた知識や指導方法，新たな視点を様々な背景をもつ児童生徒への柔軟な対応に生かし，未然防止及び，登校しづりや欠席が長期にわたっている児童生徒へのより適切な支援につなげていく」については，今後，それぞれの教員がどう実践していくかで達成度が判断される場所である。

それぞれの教員が児童生徒へ対応する際，本研修で気付いた内容，身につけた知識，生じた意欲等の研修成果を生かした実践をし，不登校児童生徒のみならず，多くの児童生徒へ柔軟に対応していくなど，支援の幅が広がっていくことを期待したい。

5 おわりに

時間確保に苦慮される中，本研修に前向きに取り組んでいただきありがとうございました。事後アンケート等を通し，本市の先生方が日々悩みを抱えながらも，児童生徒に対してよりよい対応を考え，粘り強く支援をしている様子が伝わってきました。また，コメントに記載された内容以外にも不登校児童生徒への支援の様々な角度からの視点，対応していく際のキーワードが沢山挙げられ，本市教員の質の高さを感じました。

不登校児童生徒に対しての適切な支援方法については個別の状況や時期によっても異なるため，課題も多いことと思いますが，教師一人で抱えることなく，より多くの人たちと話し合い，可能な支援を見つけ，まずはそれを信じて実践していただけたらと思います。

なお，不登校対応振り返りシートで提示された「あなたの児童生徒に対する支援の傾向」について，静岡市全校の平均と貴校教職員のデータを各校に配付しましたので，比較の上，今後の支援の参考にしていただけると幸いです。

3 連携による研修についての考察

(連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等)

本研修プログラム作成においては、前例がなく参考とする資料も得られなかったため、実質0からのスタートであった。そのような中、当初事務局では不登校児童生徒に対する教員の期待すべき姿を伝えていくことを目的とし、研修の始めに行う質問・回答の形式については、回答に応じてプラス点、マイナス点による総合得点の提示を考えました。しかし、今回連携した大学側から不登校「児童生徒に対して教員のモチベーションを上げることの大切さ」、「不登校児童生徒への支援は答えが1つでないこと」等、今後の研修の方向性を大きく左右する意見や指摘をいただいたことで、本研修の目標達成につながった。

また、本研修プログラムの「教員自身の支援の方向性を振り返る」という目標達成において大きな効力を発揮した「不登校児童生徒に対する支援の傾向」については、サンプル取得やその結果の分析等、専門レベルの知見がなくしては受講した教員に対し、説得力のあるものになり得なかった。更に、それぞれの教員が支援の傾向に気付いた後の研修講座「支援のヒント集」についても、より様々な専門性による視点が分かりやすく教員に提示され、本研修プログラムによる学びを深めることができた。大学との連携なくして本研修プログラムの開発はなし得なかったと断言できる。

しかし、その一方、大学の教員の方々は多忙な方が多く、委員会の開催には毎回日程の調整に苦労した。また、委員会での協議の時間は限られており、協議後それぞれが、課題を持ち帰ったり、事前に意見をまとめてきていただいたりという負担も掛けてしまった。新規の研修を立ち上げるに当たり、多岐に渡る準備が必要な中、限られた時間でいかに委員が集まり内容を協議し、作成していくのか、大きな課題が残る。

4 その他

[キーワード] 不登校 プログラム

[人数規模] D 補足事項 (静岡市全教員を対象とし受講者は2800人)

[研修日数(回数)] B 補足事項 (それぞれの教員が自身の時間で研修を受講したため、回数は限定できないが、研修に要する時間を考えると2から3回に分けて実施した教員が多いと思われる。)

【担当者連絡先】

●実施機関 ※実施した大学名又は教育委員会名等を記載すること

実施機関名	静岡市教育委員会	
所在地	〒424-8701 静岡市清水区旭町6番8号	
事務担当者	所属・職名	児童生徒支援課・指導主事
	氏名（ふりがな）	鈴木 重行（すずき しげゆき）
	氏名（ふりがな）	毎熊 省一（まいくま しょういち）
	事務連絡等送付先	〒424-8701 静岡市清水区旭町6番8号
	TEL/FAX	TEL 054-354-2533 FAX 054-353-7521
	E-mail	Jidou-shien@city.shizuoka.jp

●連携機関 ※共同で実施した機関名を記載すること

連携機関名	国立大学法人静岡大学	
所在地	〒422-8529 静岡市駿河区大谷836	
事務担当者	所属・職名	学務部教務課教育企画係長
	氏名（ふりがな）	鈴木 利絵（すずき りえ）
	事務連絡等送付先	〒422-8529 静岡市駿河区大谷836
	TEL/FAX	TEL 054-238-4257 FAX 054-238-5347
	E-mail	gkyoumu2@adb.shizuoka.ac.jp

連携機関名	常葉大学	
所在地	〒422-8581 静岡市駿河区弥生町6-1	
事務担当者	所属・職名	准教授
	氏名（ふりがな）	浅井 夏美（あさい なつみ）
	事務連絡等送付先	422-8581 静岡市駿河区弥生町6-1
	TEL/FAX	054-261-1378 / 054-263-2750
	E-mail	Natsumi-a@sz.tokoha-u.ac.jp